木曾御岳殺人事件

梓 林太郎

Rintarō Azusa

日文文庫

木曾御岳殺人事件

平成11年9月25日初版発行

著　者　梓　林太郎

発行者　阿部林一郎

印刷所　図書印刷株式会社

製本所　図書印刷株式会社

発行所　株式会社日本文芸社

〒101-8407
東京都千代田区神田神保町1の8
TEL　03(3294)8920（編集）
03(3294)8931（営業）
振替口座　00180-1-73081

110990925-110990925 Ⓝ 01
©Rintarō Azusa 1999
Printed in Japan

落丁・乱丁はお取りかえいたします。

（編集担当　星川・梶原）

ISBN4-537-08072-8
URL　http://www.nihonbungeisha.co.jp/

日文文庫

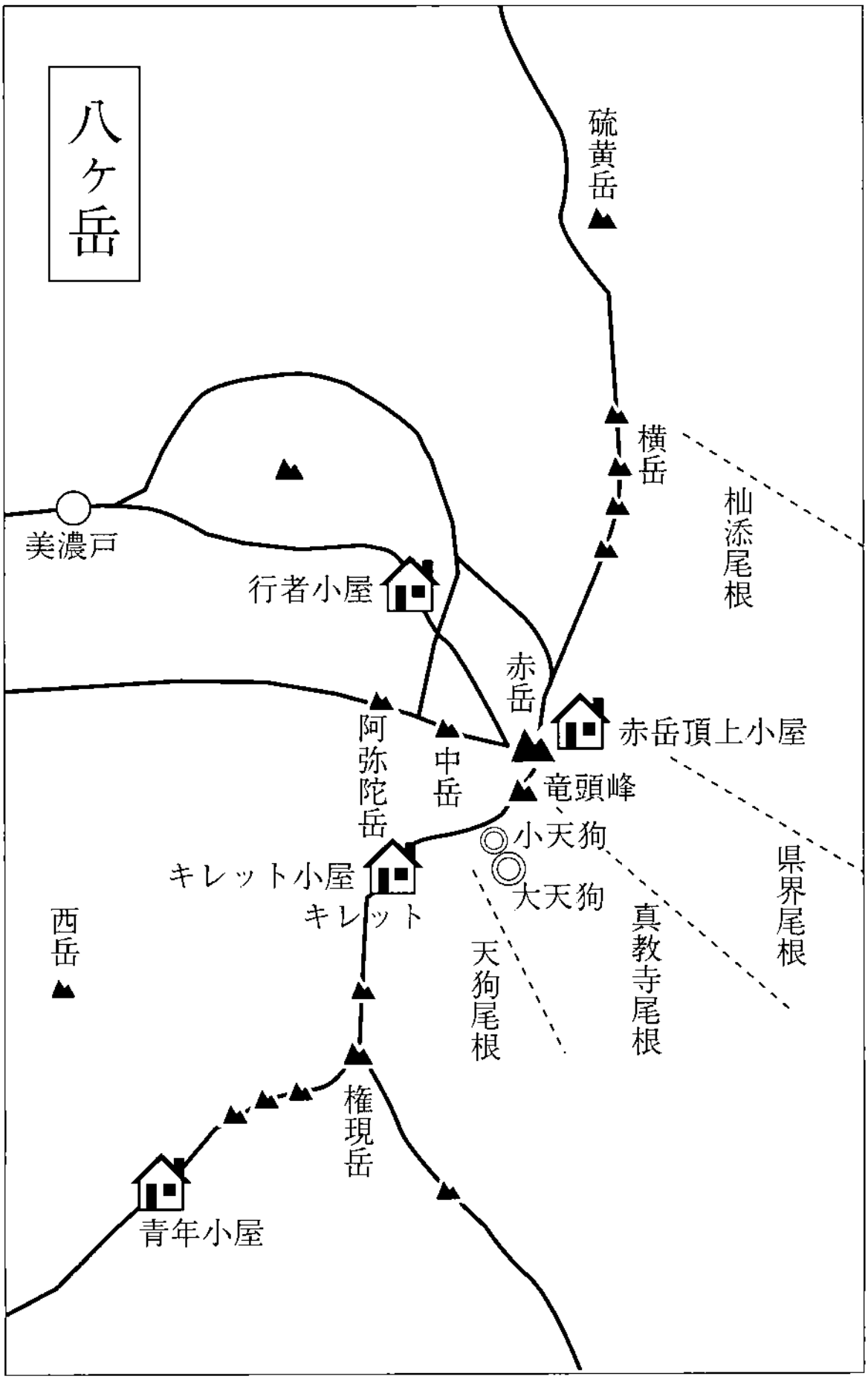
木曾御岳殺人事件

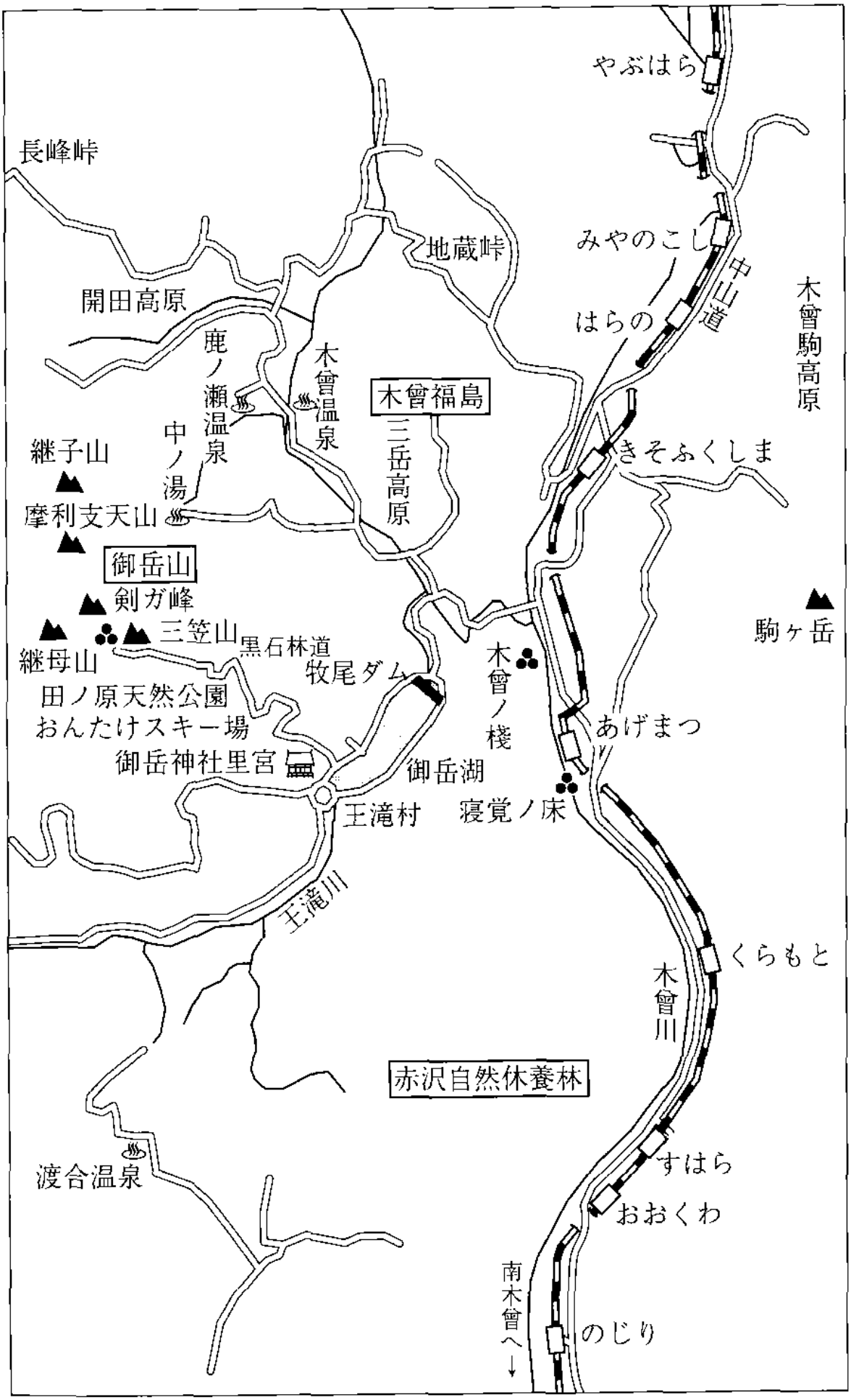
梓　林太郎

目次

プロローグ　7
第一章　赤岳の怪死体　12
第二章　9・00―7　33
第三章　木曾川の変死体　63
第四章　桑畑のある町　106
第五章　山好きの友人　132
第六章　御岳山行　176
第七章　偽名の男　213
第八章　愛情の換算　249
第九章　歪んだ岩稜　278
エピローグ　323

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com


八ケ岳
硫黄岳
横岳
杣添尾根
美濃戸
行者小屋
赤岳
赤岳頂上小屋
阿弥陀岳
中岳
竜頭峰
小天狗
大天狗
キレット小屋
キレット
県界尾根
真教寺尾根
天狗尾根
西岳
権現岳
青年小屋


やぶはら
長峰峠
地蔵峠
みやのこし
中山道
木曾駒高原
開田高原
はらの
鹿ノ瀬温泉
木曾温泉
木曾福島
三岳高原
中ノ湯
継子山
きそふくしま
摩利支天山
御岳山
剣ガ峰
駒ヶ岳
三笠山
黒石林道
継母山
牧尾ダム
木曾ノ桟
田ノ原天然公園
おんたけスキー場
あげまつ
御岳神社里宮
御岳湖
王滝村
寝覚ノ床
王滝川
くらもと
木曾川
赤沢自然休養林
渡合温泉
すはら
おおくわ
南木曾へ↓
のじり

プロローグ

長野県中央部の諏訪湖を囲む山々は、日増しに緑を濃くしていた。町を行く人の服装に白が目立つようになった。

湖畔に遊ぶ観光客や、霧ヶ峰や車山を訪れるハイカーが多くなった五月の午後、諏訪駅に警察官が十人ほど集まった。彼らは笑い声を立てたり、一人の男の手をにぎったりしている。県警本部へ転勤になった同僚を見送りにやってきた諏訪署員である。

この一団の中に、刑事課の道原伝吉と貞松敏高がまじっていた。

「長島さん。万歳しましょうか」

貞松がいった。

長島というのは転勤する外勤課員である。彼は県警本部で山岳救助を担当することになっている。諏訪署での山岳事故防止と救助活動の功績が認められて、栄転するのだ。

「万歳は勘弁してください」

長島は照れて頭に手をやった。それを見て、見送りにきた署員が笑った。

松本行きの列車が入ってきた。ホームに出た十数人は長島に励ましの言葉を贈って拍手した。

列車は屋根に陽を浴びて遠ざかった。

見送りの署員は、それぞれの持ち場へもどるために車に乗った。

「ありゃなんだい？」

道原が貞松にいって、バス発着所の左端を指差した。列車が出て、閑散としているはずの発着所の一画に人だかりができているのだ。

「行ってみましょう」

貞松が歩き出した。

人垣の中に十九か二十歳ぐらいの女性がしょんぼり立っている。黄色のシャツにジーパンでスニーカーをはいていた。肩にはデイパックが掛かっている。ごく一般的なハイカーの服装だ。

立っている人の話から、その若い女性はコンタクトレンズを落としたことが分かった。人だかりを見て、また人が寄ってきた。駅前のみやげ物屋からも人が駆けてきた。集まった人たちはコンクリートの路面に眼を這わせた。みんな同じ眼付きになった。半数ぐらいの人たちがしゃがんで、辺りに眼を走らせている。

道原と貞松も姿勢を低くした。

「もういいです。さがさないでください。みなさん、ありがとうございました」

若い女性は、デイパックを足元に置いて周りの人に頭を下げた。

しかし、誰もその場から離れようとしなかった。

「ほんとうに、もういいですから」

若い女性は泣き出した。

老人もいたし、子供の手を曳いた主婦もいたが、女性の言葉がきこえぬげに、透明な小さな落とし物を求めて眼を凝らした。路面を手さぐりしている人もいる。車から降りてきて、どうしたのかと尋ねる人もいた。

「あった」

人の眼がその声のほうへ一斉に向いた。四十代の背広を着た男が、右手をかざした。その男は、頭の上にあげた手を見て顔をほころばせた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

コンタクトレンズを受取った女性は、男に何度も頭を下げた。鼻と口を押えている。人のあいだで拍手が起こり、それが次第に大きくなった。さがし当てた男が照れた。

「道原さん」

背後から呼ばれた。

振り返ると駅前交番の若い巡査だった。

「署からの連絡で、至急電話していただきたいということです」

巡査は、警棒を押えて交番へ駆けて行った。

人だかりは、潮が退くように消えていった。コンタクトレンズを落とした女性は駅舎に向かって歩き出した。

「今少し前に青年小屋から、正気の沙汰とは思えない通報が飛び込んだ」

道原の電話に、小柳刑事課長はいった。

「青年小屋というと、八ヶ岳ですね」

「旭岳から、ズームレンズで赤岳をねらっていた登山者が、岩場から人を投げ込むところを目撃したといって、小屋へ駆け込んできたというんだ」

道原は耳を疑った。岩場から人を投げ込むところを目撃したなどという通報は初めてである。

通報者は青年小屋へ連絡したあと、富士見高原のロッジに向かって下っているというのだ。

旭岳は、八ヶ岳南部の権現岳（ごんげんだけ）の北側にある。長野県諏訪郡富士見町と山梨県北巨摩（きたこま）郡小淵沢（こぶちざわ）町と県境を接し、小海（こうみ）線清里（きよさと）駅の北西約八キロメートル。

第一章　赤岳の怪死体

1

通報者は、滝口誠次（たきぐちせいじ）という山岳写真を主にしているカメラマンだった。彼は富士見高原のロッジで待っていた。口の周りを髭（ひげ）が囲んでいる。三十代半ばだ。

道原は、ロッジの支配人に頼んで応接室を借りた。

「ぼくはここから赤岳南面をねらっていました」

滝口は、貞松の広げた地図にボールペンの先を当てた。権現岳（二七〇四メートル）

の三角点から六、七〇〇メートル北寄りである。
「人を投げ込んだというのは、どこかね？」
道原は、滝口の陽に焼けた顔をにらんだ。眼だけが光っている。
「小天狗と大天狗の鞍部です」
「そりゃ、すごい岩場だ」
貞松がいった。彼は現場がどんなかを知っているらしい。
「人を投げ込むところを見たって、どんなふうにかね？」
「抱きあげて、放り込みました」
滝口は椅子から立って両手を前に出して説明した。顔が蒼くなった。目撃の瞬間を思い出したようである。
「それはほんとうに人間なんだろうね？」
「間違いありません。一度バウンドして岩のあいだに見えなくなりました」
「投げ込んだのは男かね？」
「たぶんそうだと思います」
男にしろ女にしろ、抱えあげて投げる腕力から推して女性の犯行ではなさそうだ。
「投げ込まれたほうは、男か女か見えたかね？」

「それはよく分かりませんが、上着はたしか黄色でした」
「投げたほうの服装は？」
「茶色だったような、灰色だったような……」
どうやら鮮明な色の物を着ていたのではなさそうである。
「あなたはカメラでのぞいていたんだが、その瞬間を撮っているかね？」
「びっくりしていったんファインダーから眼を離しましたが、夢中でシャッターを押しました。どんなふうに撮れているか出来栄えの自信はありませんが……」
「そのフィルムを貸してもらえないかね。商売用のが収まっていると思うが、大事に扱うよ」
滝口は、ザックからカメラを取り出してフィルムを巻いた。彼は長いレンズを二本持っていた。
道原は、署の小柳課長に電話を入れた。滝口の目撃談を確認するために、人が投げ込まれたという現場捜索の要請である。
ロッジから権現岳までは四時間半を要する。そこから赤岳までが四時間である。小柳課長は、県警本部にヘリコプターの出動要請をするといって電話を切った。
滝口が事件を目撃したのが午前十一時頃だ。彼は撮影を中止して即座に権現岳の西に

ある権現小屋に駆け込んだ。だがそこには電話がない。それで一時間下った青年小屋へ着いて、おやじに事件を説明した。

諏訪署では、翌朝、地上からも捜索隊員を現場に向かわせることにした。

道原は、目撃者でカメラマンの滝口がいった「人を岩場から投げ込んだ」という表現が気になった。登山中に急峻（きゅうしゅん）な岩場から突き落として殺害した事件は今までに扱ってきているが、今回のようなケースは初めてである。

いずれにしても殺人事件だが、道原は首を傾けずにはいられなかった。

パーティー登山で、誰かを殺したかったら、岩場にさしかかった時、背中か胴を突けば相手は転落する。ところが滝口の話だと、人間を抱いて谷に放り込んだというのだ。

「放り込まれた人間は眠っていたんじゃないでしょうか」

貞松がいった。

「夜中や早朝ならともかく、午前十一時まで眠りこけている登山者はいないよ」

「じゃ、薬で眠らされていたのかもしれませんよ」

それなら抱かれて運ばれても分からないかもしれない。

「薬で眠らせたとしても、そういう犯罪は暗いうちにやるんじゃないか。いくら山中とはいえ、陽が高くなってからやったというのが腑（ふ）に落ちない」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com